

大地の裏切りと「あらゆるもの」の譲渡

——地震の社会学（五）——

原 田 隆 司

地震とは何か。本稿では、いくつかの地震の説明を手がかりに、地震というものの本質を探ってみたい。

第一章 発生した地震への対応

大きな地震が発生して被害が生じる。地震のことが語られる際には、それによる被害に焦点が当てられるが、そこには、さまざまな描き方がある。

——1 常識的な説明

明治から大正にかけて編纂された『古事類苑』という百科事典がある。当該の項目に関する歴史的な文献の記述が並べられており、その前には語義が説明されている。「地震」については、次のような説明がある。

（前略）凡ソ地震ノ発スルヤ、微動ニ止マルアリ、一日数回ニ及ブアリ、数日ニ渉ルアリ、年ヲ越ユルアリ、其強大ナルモノニ至リテハ、家屋ヲ倒シ、人畜ヲ損シ、地ヲ裂キ、山ヲ崩シ、川ヲ塞ギ、海嘯ヲ起コス等ノ事アリ、是ヲ以テソノ難ヲ避ケントスルヤ、或ハ屋外ニ出デ、或ハ樹下ニ座シ、或ハ竹林ニ入り、或ハ舟車ニ乗ル（後略）。

（『古事類苑』地部三、一三五五）

建物が壊れて、人は屋外に出て、少しでも安全な場所を探して、倒れずに立つて

いる大きな木の下や、地表部分を根が固めている竹林に逃げる。あるいは、もっと遠くに逃げようとする。発生した地震に対して、それが大きなものであれば、その場の人間はただ逃げ出すということしかできない。そして、一口に地震といっても、小さなものは「微動」にとどまり、それを感じたとしても日常生活に影響を与えないのである。

この説明は、現在でも一般的で常識的な説明ということができようであろう。当たり前と思われるかもしれないが、地震が「発した」後のことが説明されている。

——2 体験する、伝える

発した地震は、どのようにに体験され、また伝えられるのだろうか。

一九九五年一月一七日の早朝「5時46分55秒」、AM神戸というラジオ局は放送が停止した。「正確には、瞬間停波の後、電波に音声がない無変調状態」となった。6時の時報の後、放送が再開された。以下は、株式会社ラジオ関西震災報道記録班編の『RADIO—AM神戸69時間震災報道の記録』（長征社、二〇〇二年）からの引用である。

しゃべりましょうか。……はい。……AM神戸のスタジオです。スタジオが現在、ただいまの地震で壊れております。音声途切れております。情報が入りしだいお伝えします。（中略）神戸市須磨区のラジオ関西の外に出ますと、たくさんの方が外に出ていられています。

6 時 6 分、別の話し手が語る。

えー、ぼくも外から帰ってきたんですけども、A M 神戸のまわりのマンションのブロックも崩れてまして、住民の方々が不安げに外に出てきておられました。まだ真つ暗という状況で、マンションの壊れかけた部屋に閉じこめられた方もおられるようですが、脱出の方法がまだ見あたらないようで、とりあえずは部屋の中におられる……そんな方もおられるようです。とにかく、A M 神戸の中は、壁も崩れまして、建物もほとんどが倒れ、2 階…3 階ですか、3 階からの、天井から水も漏れてきましたが、放送はいちおうでさる状態に復旧したようです。

6 時 13 分、「一回線だけが生きていた共同通信の記事ファックスで、ようやく地震情報が入ってくる」。それが放送される。

いま、地震情報が入ってきましたが、本日の地震発生が午前 5 時 47 分ということで、姫路で震度 4 の中震、大阪も震度 4 の中震、京都が震度 5 の強震、和歌山が震度 4 の中震、それから名古屋で震度 3 の弱震、ただいま入ってきました速報です（繰り返し）。

この記録集によれば「6 時 13 分、大阪管区気象台が地震情報 3 号で『神戸が震度 6（烈震）』と発表。しかし、その情報は全く入ってこない。気象台はじめ、各機関への電話は、すべて不通だった」という。地震の被害を受けたその場所では、まさにその被害ゆえに、直後にはどのような地震なのかつかめなかったのである。外との電話連絡ができないので、ラジオ局のスタジオから見える光景、ラジオ局そのものの被害など、一番身近なところの様子をそのまま伝えるということしかできない。およそ 1 時間が経過した 6 時 41 分になって、詳しい情報が入る。

いま、また地震情報が入りました。午前 6 時 18 分、気象庁・地震火山部発

表の情報です。今日の午前 5 時 46 分ごろ、地震がありまして、震源地は淡路島で、震源の深さは 20 キロメートル、地震の規模はマグニチュード 7・2 と推定されております（繰り返し）。各地の震度は次の通りです。震度 6 の、これは烈震になりますね。震度 6 の烈震が神戸、震度 5 の強震が京都、豊岡、彦根（繰り返し）（以下略）

6 時 43 分。

いまでも、山陽電鉄の月見山駅から歩いて、スタッフがこちらのほうに向かっていたんですが、リポートありました。現在、屋根も落ちている家も多いということです。家が崩れているところもあったと、わりと住民の方が必死になって、あいだに挟まれている人とかがいるようですので、必死になって男性の方が助け出している状態だということです。どうぞ皆さん、落ちついて行動なさってください。

7 時 39 分。スタッフのひとりが、神戸市内のマンションの 10 階から報告をする。

ここから目の真下に火災現場が見えるんですが、「中略」西側に向かって、かなり大規模な火災が炎上中です。やっと目の下に、救急車と消防車が来ておりますが、放水はしておりません。どこから手をつけていいのかわからない状況で、消防隊員は水の、水路の確保に当たっているんですが、まだ放水という状況には移っておりません。ひとつ、ご注意くださいいただきたいのは、ガスの臭いが周辺に立ちこめております。都市ガスの臭いが立ちこめております。ときおり、ボンという大きな爆発音も聞こえております。皆さん、倒壊した家屋からのガス漏れが心配ですので、ご近所、十分ご注意ください。いただきますと思います。

12 時 21 分。

警察庁によりますと正午現在、兵庫県南部地震による死者は203人、行方不明者が311人にのぼっています。

可能な範囲で移動して、五感をとおして得られる状況を説明する。そして、外部からの情報を伝える。それが、地震の被害を受けた直後に、その現場に位置するラジオ局ができた報道であった。被害を受けた場所から、その被害を伝えたのである。約三百年前の一六九四年、現在の秋田県の能代の記録がある。後に触れる『増訂大日本地震史料』第二巻に所収されている「代邑聞見録」という史料には、次のように記されている。

元禄七年甲戌さつき末の七日、明行空は薄墨をたたえ、出る日は朱の盆を浮べるが如く、時ならず東風肅颯と面を打。何となく物すさまじくあやしみながら、唐土人の五月秋と詠じけんも是等の気色にやと思ひ捨し、辰の刻頃大地俄に震い出、皆足を空に逃出けり。間もなく鎮まり家に入ぬ。朝寝の人々も是に驚き起出、聞も伝えぬ強き地震、梁など外れざるやなという内、ゆり返しぬ、あわやと又逃出して、予は、妹の逃兼ねるが手を引、四五歩台所土間へ下りしに、家をもてあげ、落すように壁の崩るるを見、両手を頭上へ組ければ、拍手や能りけん。壁わかれて難なく屋根へ出、見渡せば皆潰て平地に成り、朝炊の時なれば、火の手方々に見え、人は一人も見えざりければ、我のみ生きて何かせんと、十方に暮しに、妹が呼声に氣附、我が出し所より是も難なく取出しぬ。然る所に実兄其外下人ども遁れ出、屋根へ来り、かしこ爰取^{（ひき）}のけ、家公並に慈母の梁に押れ給いしを取出し奉り、下女も掘りおこしぬ。彼音信に隣より来りし娘、梁に髪をはさまれしも起して返しぬ。只五才になり、妹の背負れ、梁に打れ果けるのみぞ長き思い草なりけり。然れ共家公を始、下々まで無恙、悦びあまり有けり。火は遠ければ家へ入りて調度の物取出すは安かりけれども、度々震て止まざりければ、たまたま生きたるからき命失いては、手を空うするに似たりと、上下堅く禁じて、手近に最安きを取かた付ぬ。後に聞けば、難な

く出けるも、調度に目くれ、再應出入して梁に打れ、或は出所をふさがれ焼死にけるも多かりしかや。其の外さまざま、一時の内の盛衰まことに夢幻泡影の金言初めて思いしらされける（後略）。

（増訂 大日本地震史料』第二巻、五一六）

同じ第二巻を四〇〇ページほど進んだところには、「工藤家記」という史料から次のような記録が掲載されている。前の地震から七〇年ほど後の一七六六年、津輕藩（現在の青森県）の弘前でのことである。

明和三年正月廿八日酉之刻大地震。

今日天氣和らき元来雪厚く時分柄余寒に候へとも折々森林に霞厚くかかり、一入春めきたる事と存候。然る所六ツ時否や乾の方より鳴動、其響き百千の雷の如く、大地動揺して暫く不止、蒼天色黒く黄にして雲掩ひかかり朦々として風なく、殊に甚た火急の殊にて遁れ出候間もなく怪我にて死傷の者夥敷、戸毎に老少の女童とも悲傷号泣の声喧しく、其外鶏犬猫の類迄東西にかけ走り、鳴うめく声凄し。其内に潰火より出火にて四方に火の手上り誠に騒動いわん方なし。去共震動止事なく既に曉迄に拾度余に至、人々肝を冷し候事なり。御家中は門内園の内、町家は街道の左右へ家々より各戸板畳等を持出し、老少幼少の者を夜具等にて圍置き、兎角して夜を明かし、火鉢或は雪の上に火を焚、やうやう朝飯など給候て、それより銘々假屋をしつらい住居せしこと既に四五日に至り候。尤雪消次第春風の度には假屋をも幾度か掛直し住居せしなり。（後略）（同上書、四二三）

今も昔も、私たちは、地震が発生する前から発生後のことまでを人に伝えようとしてきた。「聞も伝えぬ強き地震」、「大地動揺らして暫く不止」とは、昔も今も変わらぬ同じ感覚である。

一―3 対応する

大きな地震が発生した直後には、被害があるのかどうか分からないこともある。阪急電鉄の記録によれば、「兵庫県南部地震」直後の一時間余りの間に、次のような作業が行われ、被害を把握しはじめた。

- 5 時 46 分 兵庫県南部地震発生。
- 5 時 47 分 地震 2 号指令発令、全列車に緊急停止を指示。技術関係各部に地震指令を発令、施設点検を指示。
- 5 時 52 分 運転指令より各列車に旅客の安全な場所への誘導を指示。
- 5 時 53 分 伊丹駅より駅崩壊の報告受報。
- 5 時 55 分 鉄道施設部施設課、非常呼出。
- 5 時 56 分 今津線 T # 564 列車、宝塚―宝塚南口間パーク裏付近で列車脱線のため負傷者発生、救急車の要請受報。
- 6 時 00 分 電気部電路課非常呼出。電路設備の徒歩巡回開始。保安システム宝塚―西宮北口間巡回開始。車両部車両課、非常呼出。
- 6 時 13 分 本線 T # K524 列車が三宮駅大阪方で脱線を確認。甲陽園駅が地割れしているとの報告を受報。
- 6 時 20 分 夙川駅地割れ、陥没、隆起のため走行不可との報告受報。西宮車庫内および車両点検開始。
- 6 時 26 分 西宮北口―門戸厄神間国道 171 号線の橋桁落下確認。
- 6 時 39 分 今津線 T # 565 列車より大阪方第 1 軸脱線を受報。
- 6 時 40 分 保安システム園田から西宮北口、三宮―西宮北口間巡回開始。
- 6 時 43 分 門戸厄神―甲東園間、新幹線橋桁落下確認。
- 6 時 47 分 夙川―芦屋川間、民家が線路側の鉄柱によりかかり鉄柱が傾斜しているとの報告受報。
- 7 時 00 分 (仮) 地震災害対策本部設置。施設課、梅田―西宮北口間、西宮北口―三宮間、今津線西宮北口―宝塚間徒歩巡回開始。

被害状況

- ・武庫川橋梁橋台橋脚傾斜および取付盛土部道床陥没。
 - ・西宮高架橋倒壊、夙川駅道床陥没、およびホーム上家損壊、下り側沿マンショ倒壊。
 - ・下猪名川橋梁橋台背面盛土沈下。
 - ・園田高架通り狂い。
 - ・塚口跨線橋橋台背面盛土沈下陥没。
 - ・東芦屋付近擁壁倒壊。
 - 7 時 01 分 指令一斉電話により現在復旧見込みなしを連絡。西宮車庫内点検完了。
- (阪急電鉄「地震発生後 24 時間の初動状況概要(神戸線)」二〇八。引用に際して元の表形式に手を加えている。)

作業は続けられ、翌 18 日の早朝 5 時 17 分「西宮北口発梅田行き営業列車運転開始」となった。この区間だけ、翌日の始発から営業運転を再開したのである。全線が開通したのは 146 日目の 6 月 12 日である(同上書、四〇)。

一―4 避難する、避難に対応する

地震のあとに生じることとして、避難所というものがある。避難所のはじまりとは、地震の発生直後に、多くの人たちが避難してきたということである。避難所の終わりとは、事前に期限が決められて、「最後まで」避難していた人の全てが出たということである。

〈学校に避難する〉

筆者は、地震発生の三日後に、ある避難所に「ボランティア」として入った。そこは公立の中学校である。二週間後には、授業が再開された。それから約半年のあいだ、中学校と避難所が、学校というひとつの空間を分け合った。

〈十人かける十人で百人〉

学校の先生によれば、地震から約二時間後の午前七時半には「運動場には人いっ

ばい」であった。体育館は被害を受けていたので、学校は教室に入れることを決断した。一階から四階まで教室は人で埋まった。人数を把握することもできなかった。出入りは頻繁にあったし、数える余裕もなかった。ひとりの先生が、ある部屋の扉をあけて中を覗いて「十人かける十人で百人ですね」と言ったことが、その状況を物語っている。地震の直後の状況を示すのは、避難所という場所に、およそ何人くらいの人がいるのかということにつきる。避難していた人によれば「隣には知らない人が寝ている」ような状況であり、年齢も性別も住所も職業も関係なく、家族構成も、知り合いであるかどうか、何を持ってきているかも、どんな服装であるのかも、判断することなく、ただ、およその人数を把握するということである。大きな地震が発生した直後の、大都市部における「被害状況」とは、突き詰めれば、避難している人の数ということになる。正しく概数である。

〈ブロックに分ける〉

やがて、一日一日が経過し、学校／避難所としての集合的な生活が続いていく。学校や教育委員会、市の災害対策本部などの管轄のもとで、地震前の居住地の町ごとに「ブロック」をつくり、体育館などの「住む」場所を固定し、名簿をつくり、人数を把握し、弁当や飲み物などは、その人数をもとにして届くようになる。この避難所では、ブロックから代表を出してもらい、学校側と筆者などの「ボランティア」とが、定期的に会議を持つようになった。物資を分ける、炊き出しの予定を伝える、簡易トイレの掃除の分担を決める、などなど、ひとつの避難所としての「運営」である。以上は、誰も経験のないことについて、その都度、相談をしながらやっていったことである。

〈断熱材〉

教室や体育館の区割りで分けられた場所それぞれにも、いろいろな関係が生じる。体育館の床に敷いて寒さを和らげようと持ち込まれた断熱材は、一夜のうちに各所帯に分ける壁になっていた。避難していた人の話では、ある時、その上にリングが置かれていた。そこから付き合いはじまった所帯がある。「551」の餃子をもらったり、時には、夫婦喧嘩で靴下が空中を飛んでいたりする。そういう空間であった。

〈リボン〉

時間の経過とともに、避難している人たちからすれば、自分たちが日常生活をす

る場であり、ある人が会議で発言したように「大きな家族やと思ってるねん」という意識を持つような場になっていった。名簿がつくられ、人数が把握され、役割分担がなされ、立ち話をするようになってくると、学校のなかとはいえ、そこは自分たちの生活の場となった。

したがって、「外の人」が、「知らない人」が入ってくることに抵抗を感じるようになる。ある時、「外の人」「知らない人」が中に入って来られないということ、で、「中の人」は、その目印としてリボンを付けようということになった。そして人数分のリボンを用意して配布したのであるが、数日のうちに、そのリボンをつけた「知らない人」が入ってきていることが判明した。避難所という空間が、どこまで開放的な場なのか、そうではないのか、明確な基準はなかった。

〈ベンツで弁当をもらいに来る〉

仮設住宅に移る人、親戚などを頼って出て行く人、いつの間にかいなくなっている人など、人数は確実に減っていった。避難所として使える空間も、徐々に限られるようになる。それと並行して、食事や物資の配給、無料の電話の設置など、事実上、避難所にいる人たちを主な対象とする便宜が提供されるようになっていった。食事（弁当）の配給には、端的にそれが表れている。中の人、つまり避難している人の数と、外の人、つまり避難していないが食事をとりに入る人数を合計して対策本部に連絡し、毎回の食事が運び込まれていたのである。ところが、ある時から、配給は中の人だけになった。同じように地震で被害を受けたにもかかわらず、避難所にいる人だけに、食事や飲み物などが提供されるようになっていた。水道やガス、電気などが復旧しつづけるということが主な理由であった。

こうして最初の正確な人数さえ数えられないような状況は、半年後には、避難所閉鎖と共にゼロということになった。

外から持ち込まれた物資も、足りないものと余るもの、さまざまであった。余っている物資については、外の人にも渡すようにしていたが、それを取りに来る外の人たちには、中の人たちは自分たちよりもずっと大変だろう、と思われていた。大きな地震が発生し、鉄道が不通となり、ガスや水道がとまり、家に住めないという状況から「復旧」作業が進むにつれて、家のある場所や家そのものの被害状況によ

り「大変さ」は多様になってくる。頼れる親戚がいるけれど行かないという話を聞いたこともある。全壊・半壊・一部損壊、電気、ガス、水道などの状況など、いくつか「大変さ」を分類する指標があったとしても、それは避難所にいるかいないかということとは対応しない。地震直後に怪我で入院し、数日後に避難してきた人もいたが、地震直後に避難してきた人たちのなかで出て行かなかった人が避難所に居続けたということである。

ある時、ベントに乗って弁当や日用品をもらいに来る人のことが話題になった。違和感を感じる意見もあった。日常の生活水準からすれば、どこでも食事ができるはずなのに、どうして避難所に弁当をもらいに来るのか、と。しかし、生活水準とは関係なく、求める人に渡すものであれば、ベントに乗っている人も、今それが必要であるという意味では、他の人と同じだということにもなる。

「ボランティア」

筆者を含む数名の「ボランティア」が、実質的にこの避難所の「運営」を担っていた。「本部」という拠点をつくり、弁当や物資の管理、来訪者への対応、炊き出しの調整、学校との交渉などをしていった。最初の一ヶ月、二ヶ月は、毎日数多くの「ボランティア」が関わったのであるが、継続的に通う「ボランティア」は限られていた。「ボランティア」の定義や仕事の範囲などは、曖昧であって、避難している人も学校関係者もできないことを手伝うというようなものであった。筆者自身も、最初に入った時に丸一日滞在して、ペットボトル入りの水の本数を数えるなどして、その時々々の状況を把握しているのは自分しかないということが分かったので、入れ替わりやってくる「ボランティア」に指示をするなど、「運営」をするようになっていった。終了後に話を聞いてみると、自分たち避難していた人間が運営をするべきであったと振り返る人もいた。形式的には学校の管轄下で避難所は運営されたのであるが、この避難所では「ボランティア」が、その実務を担っていたということになる。

「焚出し、御救小屋、御救米」

日本では、これまで、何度となく、大きな地震が起り、同じような状況が生じてきたということもまた明白である。江戸時代には、地震や火災の被害が生じた際には、焚出しをしたり、御救小屋という避難所をつくったり、御救米として米を配

布したりと、現在と同じような救援活動が行われた。裕福な町人は「施行」として、金銭のほかに、味噌、茶、そば、沢庵、梅干し、などを配ったという。

第二章 発生した地震と被害を伝えて記録する

二―1 報じる

発生した地震は、どのように報じられるのだろうか。

一九九五年の一月、あの地震が発生した日に東京で発行された夕刊では、次のように報じられた。

神戸中心に大震災／震度 6 死者・不明者数百人／高速道路やビル崩壊―
M7・2 直下型／淡路島震源

17 日午前 5 時 46 分ごろ、近畿地方を中心に西日本から東日本にかけての広い地域で地震があった。大阪管区気象台によると、直下型地震で、神戸と洲本で震度 6 (烈震) を記録したほか、京都、彦根、豊岡で震度 5 (強震) となった。震源は淡路島付近で、北緯 34・6 度、東経 135・0 度で、震源の深さは約 20 キロ、マグニチュードは 7・2 と推定されている。この地震で淡路島や神戸をはじめ近畿の各地で建物が倒壊し、火災が発生。警察庁の正午現在のまとめによると、死者は 203 人、重傷者は 390 人。自治省消防庁によると、負傷者は 1 万 3 千人。生き埋めなど行方不明者は 331 人にのぼる。JR の新幹線、在来線、私鉄が損傷を受け、高速道路の陥没、高架の落下が相次ぎ、交通網はマヒ状態となった。気象庁は「平成 7 年 (1995 年) 兵庫県南部地震」と命名した。近畿地方で震度 6 を記録したのは、1927 年 3 月 7 日、丹後半島を中心に被害が大きかった北丹後地震 (M7・3) の豊岡 (兵庫) 以来 68 年ぶり。大阪管区気象台によると、淡路島から六甲にかけて走る断層のいずれかが動いたとみている。(1995 年 1 月 17 日 朝日新聞夕刊 東京本社 3 版 1 面)

東京発行の新聞の夕刊で、早朝に関西で発生した地震を報じた記事である。震源や震度などの地震そのものの説明と被害の概要と、過去の地震との比較が報じられている。2面以降にも多くの記事と写真がある。その後も、連日、その時点で最新とされる内容が報じられる。その多くは、いうまでもなく、被害についてである。

二―2 記録する

大きな地震が発生して被害があれば、それは記録されることも多い。現在に残るさまざまな文献資料には、それが記録されている。最も古い記録は、『日本書紀』卷第十三（允恭天皇）の「五年秋七月丙子朔己丑、地震」という記述である。允恭天皇の五年の秋七月に「地（なる）震（ふる）」という意味である。西暦四一六年とされる。

同じ『日本書紀』の卷第二十九、天武天皇十三年（西暦六八四年）十月のところには、次のように記されている。

壬辰、逮^二于人定^一、大地震。擧^レ國男女叫唱、不知東西。則山崩河涌。諸國郡官舍、及百姓倉屋、寺塔神社破壊之類、不^レ可^二勝數^一。由^レ是、人民及六畜、多死傷之。時伊豫湯泉、没而不^レ出。土左國田苑五十餘萬頃没為^レ海。古老曰、若^レ是地動、未^レ曾有^一也。（坂本太郎ほか校注『日本書紀』下）四六四―四六五）

壬辰（十四日）に、人定（午後十時ごろ）になって大きな地震がおこり、国中の男女が叫びあい、逃げまどった。山は崩れ、川はわきかえり、諸国の国郡の庁舎、百姓の家屋や倉庫、寺院・神社の破壊されたものは数知れず、人民や家畜も多く死傷した。このとき、伊予温泉（道後温泉）が埋もれて出なくなり、土左国では田五十余万頃（約一二〇〇ヘクタール）が海に没した。古老は、「このような地震は、かつてなかったことだ」と言った。

（井上光貞監訳『日本書紀』三二八八）

どの時代の記録にも、それが公式の歴史文書であっても私的な書簡類であっても、

大きな地震は、その当事者にとって「未曾有也」の出来事として記されている。それ故に記録をしたのである。

観測が開始される以前の地震、つまり文献に記されただけの地震は「歴史地震」と呼ばれている。「一八七二年あるいは一八八五年以前の地震」である（宇津徳治『地震活動総説』一八〇）。明治になって最も大きな被害の出た濃尾地震（明治二四年、一八九一年）を受けて、翌年に震災予防調査会（後に震災予防評議会と改称）という組織が発足した。その仕事のひとつが、歴史地震の記録の収集であった。その成果は、『増訂 大日本地震史料』として第一巻から第三巻が一九四一年から一九四三年に刊行された。最後の第四巻は『日本地震史料―並びに隣接地域』という表題で収集開始からほぼ半世紀後の昭和二六年（一九五一年）に刊行された。「日記・随筆・郷土誌の類」や「口碑」「伝承」、外国人が記した資料、台湾や朝鮮の地震記録、地震と噴火に関係する現象の記録などを加えて六千四百余が集められた（今村明恒「増訂大日本地震史料序」）。夥しい数の地震と噴火に関する記録が日本には伝えられてきたのである。

現在では、わずか一〇年後でも、過去の地震として簡潔にまとめられる。一九九五年の地震は、二〇〇五年の百科事典では、次のように説明される。

阪神・淡路大震災

1995年（平成7）1月17日5時46分に発生したマグニチュード7.2の、明石海峡の淡路島寄りを震源とする地震（兵庫県南部地震）に伴う地震被害。死者6425名、不明2名、負傷4万名以上。住宅全半壊20万以上、住宅全半壊7000以上以上のほろ。道路、鉄道など交通網、ガス、水道、電気、電話などライフライン施設が寸断されたほか、護岸、港湾施設などが破壊された。山麓部では地滑りが、臨海部では大規模な地盤の液状化現象が観測された。地震により被害を受けた構造物の多くは木造住宅であるが、中・高層ビルの倒壊や破壊、高架橋の破壊なども起こった。消火栓が使用不能、交通障害による消火活動の遅れ、家屋が倒壊していたことによる急速な延焼拡大などの条件下で、火災が多発し（285件と推定される）、災害をさらに大

きなものとした。

地震は、東西方向の圧縮力を受け、淡路島から神戸までの延長約 40 km にわたる南西から北東に走る断層群が約 2 m 横ずれを起こしたものとされる。断層面の破壊は、東経 135・0 度、北緯 34・6 度の明石海峡の淡路島寄り、深さ 18 km の地点から始まり、南西・北東方向へ伝播した。淡路島側では野島断層が破壊を起こし、若干の縦ずれを伴い、淡路島北西部海岸沿いの地表に約 10 km の断層が出現した。北東方向では破壊は地下深部にとどまり、地表には大きな破壊が及んでいない。神戸、洲本でも震度 6 を記録した。その後の調査により、神戸市、西宮市の一部などでは初めて震度 7 が適用された。

(『世界大百科事典 アルマナック』第二版、二〇〇五年)

あの地震は「阪神・淡路大震災」と呼ばれるものとなった。ここでも被害が簡潔に述べられ、それに続いて、発生した地震そのものについて説明されている。

第三章 回顧する、比較する

時間がさらに経過すれば、回顧されると共に、ひとつの地震の説明は他の地震とも関連づけられるようになる。

三―1 回顧する

「政府の特別の機関」として地震調査研究推進本部という組織がある。「平成 7 年 1 月 17 日に発生した阪神・淡路大震災の経験を活かし、地震に関する調査研究の成果を社会に伝え、政府として一元的に推進するために作られた組織」である。この組織が発表している資料には、次のような解説がある。

平成 7 年 1 月に発生した阪神・淡路大震災は、マグニチュード 7・3 という内陸直下の大地震で、地震調査委員会では六甲・淡路島断層帯の一部が活動したことによるものとの評価を行っています。淡路島にある野島断層では、

断層の南東側は北西側に比べ最大 1・4 m 隆起し、南西の方向へ最大 2・1 m ずれました。

地震が発生する直前における六甲・淡路島断層帯主部の淡路島西岸区間(野島断層を含む区間)での発生確率を後から計算したところ、30 年以内に地震が起こる確率は 0・02 ～ 8 % であったことがわかりました。

そして、現在「地震発生可能性の長期評価」を進める中で、兵庫県南部地震と同程度か、それ以上の確率で地震が発生する可能性のある活断層が数多くあることがわかってきています。

(地震調査研究推進本部のホームページ <http://www.jishin.go.jp/>、二〇一四年一〇月)

日本には「地震が発生する可能性のある活断層」は「数多く」あり、どこでも大きな地震が発生する。「阪神・淡路大震災」も、その数多くの地震のひとつであったということになる。それは、直前の発生確率が低くても発生するものと説明される。

三―2 比較する、分析する

これまでに発生したとされる地震のひとつひとつは集約されて、比較され、そこに規則性を見いだそうということにもなる。

国立天文台が編纂して毎年発行される『理科年表』という資料集がある。暦、天文、気象、物理・化学、地学、生物、環境という七つの部に分かれており、地学部は、地理、火山、地震、地磁気および重力、電離圏の五つに分かれている。二〇一三年一月発行の「第八七冊」には、「日本付近のおもな被害地震年代表」という一覧がある。西暦四一六年の「地震」というだけの『日本書記』の記述から二〇一三年三月までに発生した四三〇の地震が記載されている。それぞれについて、西暦(日本暦)、北緯、東経、M、マグニチュード、地域、名称、被害摘要が記されている。「阪神・淡路大震災」は、404 という番号が付けられて、次のように記されている。

1995 1 17 (平成 7) 34・6°N 135・0°E M7・3

Mw6・9 「被害等級」6 淡路島付近 『兵庫県南部地震』(Kobe Earthquake) 『阪神・淡路大震災』 活断層の活動によるいわゆる直下型地震。神戸、洲本で震度6だったが、現地調査により淡路島の一部から神戸市、芦屋市、西宮市、宝塚市にかけて震度7の地域があることが明らかになった。多くの木造家屋、鉄筋コンクリート造、鉄骨造などの建物のほか、高速道路、新幹線を含む鉄道線路なども崩壊した。被害は、死6434、不明3、傷43792、住家全壊104906、半壊144274、全半焼7132など。早朝であったため、死者の多くは家屋の倒壊と火災による。

ちなみに「東北地方太平洋沖地震」は、423番である。

2011 3 11 (平成23) 38・1°N 142・9°E Mw9・1 「被害等級」7 三陸沖 『東北地方太平洋沖地震』(Tohoku Earthquake) 『東日本大震災』 日本海溝沿いの沈み込み帯の大部分、三陸沖中部から茨城県沖までのプレート境界を震源域とする逆断層型超巨大地震(深さ24km)。3月9日にM7・3(Mw7・4)の前震、震源域内や付近の余震・誘発地震はM7・0以上が6回、M6・0以上が97回、死18493、不明2683、傷6217、住家全壊128801、半壊269675、(余震・誘発地震を一部含む 2013年3月現在)。死者の90%以上が水死で、原発事故を含む被害の多くは巨大津波(現地調査によれば最大約40m)によるもの。最大震度7(宮城県栗原市)、6強が宮城県13市町村、福島県11市町、茨城県8市、栃木県5市町だが、揺れによる被害は比較的大きくなかった。この領域では未知の規模で、869年貞観の三陸沖地震と1896年三陸沖地震級の津波地震が合わせて襲来との見方がある。

地震とそれによる被害の概要が、簡潔にまとめられている。『理科年表』では、約一六〇〇年間の四三〇の地震が比較できるのである。

二〇一二年末までの「被害地震」を集めた『日本被害地震総覧599—2012』には、次のような説明がある。

〔西暦〕599年から2012年までの1414年間の被害地震数は、965、明治以後のみでは145年間に623の被害地震となり、年平均は約4・3回である。最近63年間では総数364で年平均は5・8回となる。近年になるほど記録が整って、微小被害地震も漏れなく記録されるようになったからである(宇佐美龍夫ほか著『日本被害地震総覧599—2012』一七)。

同書では、被害地震を「家屋・人工構築物・地盤(面)になんらかの損傷・変化のあった地震」と定義している。そして、次のような総括がある。

日本付近では、平均して、規模「マグニチュード」6以上の地震が年間16〜17回、7以上が1〜2回、8以上の地震は10年に約1回の割合で起きている。規模6以上の地震が内陸浅所に起これば必ず多少の被害を伴う。条件が悪ければ5程度のときにも小被害を伴う。わが国の地震は洋上にあることが多いので、被害の点では助かっている(同上書、四)。

興味深いのは「日本付近」という範囲である。被害を及ぼした地震は、震源が陸地(の下)のものばかりでなく、海(の下)のものも含まれている。ここでの指摘は、被害を及ぼさなかったものも含めての数と頻度である。日本列島は、世界でも特に地震の発生が多い場所であることが明らかになってきたが、私たちの暮らす地面の真下で起こるものよりも、「洋上」で発生するものが多いので、「被害の点では助かっている」というのである。二〇一四年の「東北地方太平洋沖地震」は「洋上」で発生したものであり、近い将来に発生するといわれている「南海トラフ地震」も「洋上」で発生する。そして、「内陸浅所」で発生すれば、兵庫県南部地震のように「必ず多少の被害を伴う」のである。

地震をとらえる方法として、手に入る史料を総合して、規模と被害との関連性を探る。ひとつひとつの地震は、そうした分析にとって有用な素材となる。千年前でも、百年前でも、十年前でも、規模や被害を推測できる史料があるものは、すべて同等に扱われる。

ここでは、ひとつひとつの地震は数多くの地震のなかのひとつとして扱われ、番号が付され、計算に用いられる。

第四章 地震が起きることの説明

これまでみてきたように、第一には、ひとつの地震に注目すれば、その発生直後から生じたことがらが記され、被害について述べられる。地震を語るということは、多くの場合、その地震によって生じた事態について語るということになる。

そして、第二には、数多くの地震が発生してきた日本では、記録やデータがある限り、集約され、比較され、全体の傾向が論じられる。ここでは、ひとつひとつの地震による被害は、何百という数の地震による被害という集合を構成する要素となる。

地震について論じるという三つ目の要素として、地震が発生する理由を説明したものがある。これは、近代科学としての地質学や地震学などの研究成果として述べられることが多い。この章では、そうした説明を取り上げてみたい。

四—1 百万年に千回

どうして、あるいは、どのようにして、ひとつの地震が発生したのか。

一九九五年のあの地震について、専門家による詳細な考察が加えられている。一九九六年に発表された論文には、次のような指摘がある。

兵庫県南部地震は、活断層が引き起こした「直下型地震」といわれ、淡路島では野島断層沿いに明瞭な地震断層が出現した。一方、六甲側では明瞭な地震断層が出現しなかったにもかかわらず、「震災の帯」と称される激震地

帯が、神戸・阪神地域の市街地に生じた。調査が進むにつれ「震災の帯」は主として、六甲山地と大阪盆地との間の埋没大地形によってもたらされたものであることが明らかになってきた。(藤田和夫・佐野正人「阪神・淡路大震災と六甲変動―「震災の帯」をもたらした埋没地形」七九三)

この考察によると、約四六億年の地球の歴史において「現代」として区分される約二〇〇万年前から現在までの「第四紀」に、「六甲変動」というものが生じた。それまではほぼ平地であった場所が一〇〇〇メートル沈み込んで現在の大阪湾になり、そこから約二キロ北のところが約一〇〇〇メートル隆起して六甲山になった。現在、山頂から海底の堆積層の下にある基盤の花崗岩の層まで、標高差二〇〇メートルの断崖が形成されている。この六甲変動によってできた「埋没大地形」には、地表には現れないいくつもの「伏在活断層」があり、それらの海側に沿ったところが「震災の帯」であるというのである。

「震災の帯」で揺れが強くなる要因もいくつか推測されている。まず、硬い地盤では、まだ堆積したままで固まっていけない地層よりも、震源域から地震波が伝わる速度は「ずっと速い」。したがって、硬くて浅い地盤では地震波は先に地表に達して周囲に広がる。ここに深くて固まっていない堆積層からの地震波が重なり、波が増幅される。それが「伏在活断層」のところである。これよりも海岸寄りの所では、地盤は軟弱なので液状化が発生し、それが「免震効果」を発揮したのでそれほど揺れなかった。それよりも少し山側にある「震災の帯」の大部分は「山麓扇状地」に入っているのだ、液状化しなかったので激しく揺れたというのである。こうして「震災の帯」は、「伏在活断層」という最も大きな要因のうえに、「表層の地形や地盤特性などの要素も加わった複合的な災害」と考えられる。さらに、ひとつの地震が生じると「ただちにつきの歪エネルギーを蓄積しはじめる」。つまり「兵庫県南部地震」は、大きな変動過程の一環として位置づけることができる(八〇五)。

この論文の筆者の一人である藤田和夫は、一九八五年の著書において、この「六甲変動」を含む近畿の地殻変動プロセスについて次のように指摘している。

ようやくこの百万年間の近畿の地殻変動プロセスがはっきりしてきた。それは平均すると年1ミリメートル程度であるといっても、毎年1ミリメートルずつ徐々に進行してきたものではなさそうである。ふだんは動かざる大地としてひずみエネルギーを蓄積しておいて、千年単位ぐらいで、地震をとめないながら一挙にジャンプするように進行してきたとみられる。千年では一メートルの変位が断層に沿っておこり得る計算である。(藤田和夫『変動する日本列島』一一九)

以上の考察は、一九九五年の「兵庫県南部地震」において、「明瞭な地震断層が出現しなかった」ところで激震が生じた理由を説明するものである。しかし、それは同時に「兵庫県南部地震」と同じような地震が幾度も発生することで、大阪湾と六甲山という地形が形成されたということであり、この六甲変動は今後も続くということの意味している。つまり、千年に一度の間隔で大きな地震が発生し、そのたびごとに、一メートルの変位があり、この一メートルの変位が千回積み重なって、現在の六甲山頂は約一〇〇メートルに達しているのである。要するに、これまでの百万年間に千年間隔で千回発生してきた「兵庫県南部地震」と同様の地震が、これからは発生するという推測である。逆の言い方をすれば、「兵庫県南部地震」は、これまで約千年間隔で千回発生してきた地震のひとつであって、何も特別な地震ではないということになる。

この説明は、発生以前のこと、発生に至るまでのことがらについて言及しているだけでなく、これからも同じように地震が発生することを告げている。「ふだんは動かざる大地としてひずみエネルギーを蓄積しておいて、千年単位ぐらいで、地震をとめないながら一挙にジャンプするように進行してきた」ということは、ひとつの地震が発生した理由を説明するのではなく、ほぼ一定の間隔ですっと地震が発生するものだと説明している。ひとつひとつの地震の発生には個別の理由というものはないのである。

四―2 日本列島という場所

こうした地震の発生は、より根本的に、日本列島の成り立ちから説明されている。地質学の小島圭二は、次のように述べている。

日本は災害の国です。なぜ日本は災害の国なのか、日本には、どんな猛威があつて、世界のほかの地域とどう違うのかを、まず考えてみましょう。これには日本列島の位置が大きく関わってきます。日本列島の略図を書くとき、日本列島の東には、日本海溝という急峻な深い海があります。その日本海溝から北西に伊豆半島に向かって相模トラフが入り込んでいます。「トラフ」というのは、底が比較的平らな深い海で、舟状海盆ということもあります。一方、日本列島の南にも南海トラフと琉球トラフという、やはり深い海があります。南海トラフは、相模トラフとは反対側から伊豆半島に向かって入り込んでいます。このような、海溝やトラフはプレートとプレートの境界に当たります。

プレートは「厚さ一〇〇キロメートル程度の岩板」であり、地球全体が十数枚のプレートが離れたり、ほかのプレートの下に沈み込んだり、衝突したりするという「大規模な地学現象」が起こっている。このような考え方はプレートテクトニクスと呼ばれている。

日本列島に地震や火山があつて、災害の国であるということは、このようなモデルで簡単に理解することができます。日本列島のように、プレートの境界に位置して、地面が動いたり噴火がおこったりするような所を「変動帯」と呼んでいます。

変動帯であることは、地震や火山ばかりでなく、他の災害も引き起こすという。

プレートが押すと、地震や火山ばかりでなく、地殻も激しく変動します。

海溝付近には、日本列島から削り出された土砂が海底に厚くたまっている。川によって陸から流れ出た土砂が、海底の土砂崩れなどによって、海底深くへと運ばれてたまっているのです。そこを、海の方からプレートが押し入ります。堆積物は整然とつもっていらなくて、しわくちゃになってしまします。さらに押されると、このようなしわくちゃが隆起して陸に「付加」されます。つまり、海溝付近にたまった新しい堆積物が、比較的早い時期に地面に顔を出すことになります。(中略) 日本列島には、このような、まだ固結していない半固結の地層が地表に露出している訳です。そんなものが、風雨にさらされると、もとの土砂に戻ろうとします。崖崩れがおこる、地すべりがおこるということです。

また日本列島には火山からの噴出物が大量に積もっていますが、それは軟らかく積み上がっているだけです。やはり崖崩れ・地すべりをおこします。

東日本は、このような「軟岩」と呼ばれる地質からなっている。西日本では、「大陸地殻の代表的な地質である花崗岩が広く地表に顔を出している」。地表から数十メートルは「深層風化」が激しいので、「崖崩れや土石流のメッカ」となっているという。

以上のような地面の様子の上に気候の条件が重なる。梅雨明けの集中豪雨、台風、そして冬には日本海側の豪雪がある。

日本列島というのは、大陸の東側の中緯度にあることが、気候の面から見ても災害の国になる要因となっているわけです。

以上の説明で、日本がなぜ災害の国なのか理解いただけたことと思います。つまり、変動帯であることと、台風で代表される気象条件とか織りなす綾、言い替えると、「火山と地震の国」、そして「豪雨と豪雪の国」が日本であるといえるでしょう。(小島圭二「自然災害を読む」——一一)

こうして、「自然災害」が発生する必然的な理由が説明されると、地震もそのな

かのひとつの項目となる。日本列島は常に地震が発生する場所なのである。

四—3 揺れる理由

地震の考察に際して次に取り上げるのは、地面の揺れが建物の揺れとなっていく部分である。

現在のように地球の表面が海と陸に分かれたのが四〇億年前といわれている。日本列島の地面の下は、古いものでも六億年前のものであって、大部分は二億年よりも新しい時期にできている。そして、沖積世という、二万年前の最後の氷河期以降に、海面の上昇で水中に堆積した地層は、「つくりたての地面」であり、「充分には固まっていない」という。そうした地面の上に建物をつくってきたのである。海に囲まれ斜面の多い日本では、石を並べて暮らしてきた。石垣というものが随所で使われてきたという。棚田や城郭は、石垣で囲んでつくられている。建物のほうは、木を使ってきた。木材を割る方法や、木材同士をつなぎ合わせる方法が開発されてきた。柱の下に土台となる石を置いたほうが地震に強いことも江戸時代には指摘されていた。江戸初期までは二階建ての建物はほとんどなかった。都市部の庶民の住宅に二階建てが広まるのは明治後期から大正時代にかけてであるという。しかし、明治末期になって、鉄筋コンクリートと鉄骨が建物に使われるようになる。木材が火災に弱いということもあった。石は割れるが、金属は割れずに撓むのである。一九八〇年代から「超高層鉄筋コンクリート建築物」がさかんにつくられるようになったという。とはいえ、今でも、地下で生じた地震動が地面に伝わり地面の上のものを揺り動かす。これが地震である。私たちの足下の地面が揺れるということが地震である。その地面の上に、建物が、揺れるものが、つくられてきたのである。

第五章 伝統に忠実な自然—地震と人間の「隔たり」

地震の発生と人間とは、どのような関係としてとらえることができるのだろうか。物理学者の寺田寅彦は、大正一二年(一九二三年)に発生した「関東大地震」の報告書も書いているが、文筆家としても著名である。昭和八年(一九三三年)に発

表した「津浪と人間」では、この年に発生した東北の大津波と同様の津波が三十七年前にも発生したことを例にして、地震・津波発生の間隔と人間の時間との「隔たり」を、端的に指摘している。

津波が発生した直後には、政府の人間も、メディアも、研究者もやってきて次の被害を予防する策がつけられ推奨もされる。しかし、三十七年後には、前の津波を経験した大人は世を去り、世の中は世代交代をしまっている。

三十七年と云えば大して長くも聞こえないが、日数にすれば一万三千五百五日である。その間に朝日夕日は一万三千五百五回ずつ平和な浜辺の平均水準線に近い波打際を照らすのである。津浪に懲りて、はじめは高い処だけに住居を移していても、五年たち、十年たち、十五年二十年とたつ間には、やはりいつともなく低い処を求めて人口は移っていくであろう。そうして運命の一万数千日の終わりの日が忍びやかに近づくのである。(寺田寅彦「津浪と人間」一三八)

ここから、寺田独特の展開がはじまる。

これが、二年、三年、あるいは五年に一回はきつと十数メートルの高波が襲って来るのであったら、津浪はもう天変でも地異でもなくなるであろう。(中略)夜というものが二十四時間ごとに繰返されるからよいが、約五十年に一度、しかも不定期に突然に夜が廻り合せてくるのであったら、その時に如何なる事柄が起るであろうか。おそらく名状の出来ない混乱が生じるであろう。そうしてやはり人命財産の著しい損失が起らないとは限らない。(同上書、一三九)

人の記憶に頼ることができないとすれば、法律などで対策をたてることはできるだろうか。

国は永続しても政府の役人は百年の後には必ず入れ代わっている。役人が

代わる間には法令も時々代わる恐れがある。その法令が、無事な一万何千日間の生活に甚だ不便なものである場合は猶更そうである。(同上書、一四〇)

記念碑を建てて「永久的警告」として残す方法はどうだろうか。

はじめは人目に付きやすい処に立ててあるのが、道路改修、市区改正等の行われる度にあちらこちらと移されて、おしまいはどこの山蔭の竹藪の中に埋もれないとも限らない。そういう時に若干の老人が昔の例を引いてやかましく云つても、例えば「市会議員」などというようなものは、そんなことは相手にしないであろう。そうしてその碑石が八重律に埋もれた頃に、時分はよしと次の津浪がそろそろ準備されるであろう。(同上書、一四〇)

前の世代の「言い置き」などを気に留める人も今の時代ではない、と寺田は述べる。

しかし困ったことには「自然」は過去の習慣に忠実である。地震や津浪は新思想の流行などには委細かまわず、頑迷に、保守的に執念深くやって来るのである。紀元前二十世紀にあったことが紀元二千年にも全く同じように行われるのである。科学の法則とは畢竟「自然の記憶の覚え書き」である。自然ほど伝統に忠実なものはないのである。(同上書、一四一)

では、どうすればいいのだろうか。

こういう災害を防ぐには、人間の寿命を十倍か百倍に延ばすか、ただし地震津浪の週期を十分の一か百分の一に縮めるかすればよい。そうすれば災害はもはや災害ではなく五風十雨の亜類となってしまうであろう。しかしそれが出来ない相談であるとすれば、残る唯一の方法は人間がもう少し過去の記録を忘れないように努力するより他はないであろう。(同上書、一四二―一四三)

こうして寺田は、地震・津波と人間との間の最大の問題である時間の「ずれ」ということを見事に指摘している。ひとりひとりの人生のなかでは収斂できない現象としての地震。

同じような説明は、最近の研究のなかにもある。

地震の場合、その発生準備には数十年～数千年という長い時間がかかる一方で、ひとたび発生すれば長くても数分ですべてが終わってしまう（日本地震学会地震予知検討委員会編『地震予知の科学』三一）。

先にも触れたように、明治以降の観測だけでは日本における地震を分析するには不十分であり、それまでに記され残されている古文書などで描かれた地震の被害を収集するという作業が長く続けられている。観測がはじまる以前に起きたとされる地震は「歴史地震」と呼ばれているのであるが、その研究者は、次のように指摘している。

わが国の被害地震の分布図をみると、日本中いたる所に地震が発生し、逃げ場がないようにみえる。しかし、注意してみると、同じ地点で同じくらい規模の地震が発生することは、そう多くはない。いいかえれば、日本人が自分の生まれた土地で一生を終えるとして、同じような地震で二回も被害を受けることは、まずあり得ないのである。詳しくしらべると、太平洋沖には規模八クラスの巨大地震が次々に発生しているようであるが、同一地点についてみれば、約百年以上の間において発生している（場所によって百年よりも短い所もある。例 北海道南東沖）。また内陸の地震についてみると、この地震発生の間隔は約千年といわれている。

したがって、大地震は日本人にとっては、ほとんど常に新しい経験であり、自己の経験を次に生かすということは少ない。こういうことはない方が望ましいのであるが、災害を軽減するという立場からみると、先祖の経験の伝承よりは、自己の経験の方が有効であることはいままでもない。しかし、地震

の場合は、その発生間隔の問題もあって、先祖の経験を生かさなければ有効な災害対策を立てにくいのである。（宇佐美龍夫『大地震―古記録に学ぶ』八一―九）

また、地震は、極めて短い時間で終わるだけでなく、空間的にも局地的である。

江戸時代、飢饉は避け難い厄災であったから、これに対する予測・対策は経験的に蓄積されるところ大なるものがあつた。また五ヶ月ほどの稲の実りに至るまでの期間に凶作か否かの判断は前もって可能であつた。しかし、火災や地震は、これと違って発生は突発的であり、予測不可能である。とくに地震の場合は、突発的に起こり、瞬時にその結果を定めてしまう場合が多い。余震が長く人々の恐怖をかき立てるものとなつたにしても、二次災害を除けば、最初に受けた被害を大幅に増大させることはなかった。被害は、たとえばそれが大規模地震と呼ばれるようなものであつても、死亡者・負傷者、地上の構造物の瓦解など可視的範囲に留まる（北原糸子『地震の社会史―安政大地震と民衆』三三三）。

「突発的に起こり、瞬時にその結果を定めてしまう」という地震。「可視的範囲に留まる」という地震。「大地震は、日本人にとっては、ほとんど常に新しい経験」であるということ。あらゆる意味において、大地震とは、私たちの日常とは相容れないような性質のものということなのだろうか。いつも「未曾有也」と言い続ける、それが大地震というものであろうか。

第六章 大地の裏切りと

「あらゆるもの」の譲渡―地震の本質

ここまで考察してきたことを、簡単にまとめておきたい。

私たちは、日常的に地震の揺れを感じている。軽微な地震の場合には、その揺れ

を感じるだけで、被害は何も生じない。それは本稿の最初に取り上げた『古事類苑』の説明のとおりである。

それに対して、同じ地震といっても、大地震は大きな被害が生じた地震のことである。しかも、地震による被害は、地震の発生直後のわずかの間に生じることが多い。地震を受け止めるということは、その被害を受け止めるということである。被害を受けた場所にあるラジオ局では、その建物の被害を伝えつつ、目にしたものをそのまま言葉にして電波にのせることができた、あるいはそれしかなかった。

大地震について語られる時には、その被害がいかに大きなものであったのかが語られる。地面が割れる、電車が脱線する、高速道路が倒れる、などなど、地震そのものではなく、被害について論じられる。江戸時代の被害について記されたものをみれば、今の私たちの暮らしている地面の上の建物などとの違いが分かる。突然、大きく地面が揺れるということまでは同じでも、その後の地面の上の様子は違う。それらは、記され記録として残されることも多い。

どうして、あの大きな地震が起こったのかと、特定の地震についてその理由を探すこともなされてきた。しかし、地震学などの研究によれば、地震そのものは日本列島においては頻繁に発生するものであり、過去にも数多く発生してきたし、未来にも数多く発生するものだという。ということは、ひとつひとつの地震が発生した場所にも日付けにも時間にも深い意味はなく、他の夥しい地震と同じように、まさに日常的に発生しているものであるとしか理解することはできなくなる。

地震の被害のほうに目を転じてみれば、ひとつひとつの地震は、ある時にある場所ので発生し、特有の被害のかたちをとるものであり、固有のものであるということができる。人々が、地震が発生する直前まで居た場所に居続けることができず、どこかに避難をする。多くの人が特定の場所に集まり、避難所というようなかたちとなる。避難所は、毎日、毎時間、試行錯誤を繰り返しながら運営される。人数は絶えず減少し、期間を区切られて閉鎖される。その過程は、固有のものであり、時代と場所により、ひとつひとつ異なるものであろう。

地震の発生に焦点をあてれば、遠い昔から頻繁に起こってきたということができる。しかし、ひとりひとりとっては「未曾有也」、つまり「ほとんど常に新し

い経験」である。ここには決定的な「隔たり」がある。寺田寅彦が指摘したように、人生がもつと長いか、地震の発生間隔がもつと短ければ、両者の間に「隔たり」はなく、私たちは日常のこととして地震に対することができると言える。こうしたことを前章までで考えてきた。

この「隔たり」を埋めるために、しばしば論じられるのは、地震そのものは「自然現象」であるが、被害のほうは「社会的」なものの、あるいはもつと直截的に地震の被害は「人為的」なものであるという考え方である。建物も、道路も、部屋のなかのものも、人間が設計してつくったものであるから、地震による揺れが、それらの人工物に作用し、それらよって人の命を奪ったり、人を傷つけたというのである。「兵庫県南部地震」は「早朝であったため、死者の多くは家屋の倒壊と火災による」と『理科年表』でも説明されている。救援活動が迅速でない、後々の手当てが満足なものではないといったことがしばしば指摘される。もつとこうしていればと自分自身を含む人間を責めることになる。何の前触れもなく、突然大きく地面が揺れるとしても、それに備えていない「人間」や「社会」に責任があるというのである。今、この場所ので起こったからこそ、こんな被害が生じたのだという受け止め方である。しかし、こうした考え方は、地震だけでなく、さまざまな「自然災害」にも当てはめることができる。地震の本質を探すためには、別の観点から考える必要がある。

避難所で出会った女性の言葉が思い出される。当時、五十代の彼女は一人暮らしをしていて地震に遭遇した。後に仮設住宅に移り、次いで公営住宅で住むことになった。仮設住宅に住んでいた時に、その住宅の集会で、彼女は次のように発言したという。

壊れるような家に住んでいたほうが悪いのよ。

その後、しばらく、だれも発言する人はいなかったという。筆者も、地震の直後に、いろいろな人から体験や発言を聞いたのであるが、この話を聞いたあとは、しばらく言葉が出なかった。避難所でも仮設住宅でも、行政に対して、より適切な対応

をしてほしいという意見が続いていた。もちろん行政に対して、あるいは公的な立場の人に感謝した人もいるだろう。

その中で、この発言は、まったく方向性の異なるものである。仮設住宅の集会という場面で、こうした発言ができるのは稀なことだと思った。しかし、本稿では触れないが、彼女の地震経験やそれまでの人生に重ね合わせると納得できるものでもあった。そうした個人的な側面は別として、この発言は、現代の私たちにとっての地震というものの本質をついているものだと思う。地震が発生して、どれだけ大きな揺れがあったとしても、それによって建物が壊れることがなければ大きな被害はないということなのである。

地震が発生しても建物などが揺れない方法も、考えられないことはない。二〇一一年三月の東北地方太平洋沖地震の後に、日本地震学会の会長が次のように語っている。

―地震学者として何をすべきだとお考えですか。

地震がきたら、街全体がふわっと浮き上がった、被害を避けられるような画期的なシステムができないか。マンガのような話を夢みたりしている。い

まは、地震の正体を見極める研究を続けることが、我々、地震学者の社会に對する責任の取り方だと思う（『朝日新聞』二〇一一年八月一七日）。

地震の専門家が「街全体」を地面から切り離し、揺れが及ばないことを夢想する。最新の高層の建物も、工夫されて揺れにくいものがつくられつつあるが、建物が地面と繋がったままである以上、揺れることは避けられない。免震や制震といった揺れを極力減らそうとする仕組みもあるが、地震の影響を完全になくするためには、すべての構造物を、すなわち「街全体」を地面から切り離せばいいのである。

地震の発生前に、そこに建てられていた建物は、地震が発生しなかった間は、大地の上で不動であった。そこで私たちは日常を送っていた。そこに、何の前触れもなく大きな地震が地下から伝わり、建物を激しく揺らせ、建物は壊れる。あたりに、壊れた建物と壊れていない建物がある。やがて、「被害」は、局地的であるこ

とが判明する。他の場所では、電車に一五分も乗れば着くところでは、多少の揺れはあっても日常が続いている。余震は何ヶ月も続くが、それでも次第に収まってくる。そして、百年後、千年後、同じように大きく揺れるという。

地震による揺れと人間との関係は、科学的な研究により「大地」のほうを主にして説明すれば、まったく逆のものとなる。長い間、地球の表層部分で岩石の破壊が発生している。それが地面に伝わり地震という現象が生じている。そういう地面である日本列島に人間が住みはじめて、地面の上にいるんなものをつくり、つくった建物の中や上や下で暮らすようになってきたのである。

女性の発言からは、そうした含意を引き出すことができる。

ここで、ふたつの指摘を取り上げてみたい。まず一つめは、一九二三年の関東大地震を体験した社会学者の回想である。

他の災害と違って、地震は特別なもののように思われます。火災、台風、洪水などの場合は、それが襲いかかってきても、私たちは、安定した大地の上に立って、これと戦うことができます。これらの災害は、まあ、外部から襲いかかる敵のようなもので、それと戦う時に、大地は私たちの味方になってくれます。しかし、その大地が揺れ始めると、私たちは、最後の味方に裏切られたように感じ、敵が内部にいたことに気づくのです。（中略）火災も、台風も、洪水も、私たちが平静な心を持つことを許しはしませんが、地震には、何か質の違うものがあるって、大地が深い底から揺れ始めると、人間の存在も深い底から揺れ始めるように思われます。（清水幾太郎「明日に迫ったこの国難」二六六―二六九）。

ふたつめは、ミッシェル・セールという哲学者の「準―客体」という考え方である。私たちがなじんでいる「主体」とか「客体」というような考え方は別のとらえ方である。ラグビーという球技を例にして説明をしている。

ボールは人の身体のためにそこにあるのではない。実際はその正反対である。人間の身体がボールの対象なのだ。(中略) プレーヤーは、ボールについてこさせたりボールを利用したりするのは正反対に、ボールを追ひ、ボールに仕えるのだ。ボールは人体の主体であり、プレーヤーたちの主体である。それは諸主体の主体のようなものである。プレーをするということは本質であるボールの属性になることに他ならない。規則はボールのために書かれており、ボールとの関連で決定されている。(ミッシェル・セール『パラジット―寄食者の論理』三七五)

こうした球技におけるボールとプレーヤーの関係のとらえ方を、セールは、「個人」と「集団」との「関係」ということに展開する。

任意の集団において、「私」も「われわれ」も分割できないものであるかのようにすべてが生起する。彼はボールをもっているが、われわれはもはやボールをもっていない。「われわれ」を考えるにあたって、どうしても考え及ばなくてはならないこと、それはまさしくパスである。ところがパスは「私」の放棄である。人は自分固有の「私」をあたえることができるであろうか。それをおこなうために準―客体、準―主体となる対象があるのだが、それは存在であるのか関係であるのかわからないし、存在の断片であるのかあるいは関係の末端であるのかわからない。こうしたものによって、個体化の原理はパスされ消し去られる(同上書、三七八―三七九)。

それでは、「私」や「われわれ」は、どのようにつかまえることができるのだろうか。

そこには主権の放棄に似た何かが、あるいは何らかの行為がある。「われわれ」は「私」の総計ではない。それは「私」の遺贈、「私」の委譲、辞退、放棄によって生みだされる新しいものである。「われわれ」は、「私」の総体であるよりも、「私」の譲渡の総体の集合である。それは個体化の原理の陶酔、

恍惚、無化のなかでいきなり出現する。この恍惚状態は準―客体によって容易に生みだされるのだが、人間の身体はこの準―客体のしもべあるいは客体になる。人間の肉体がいかに準―客体のまわりを駆け回るか、人間の身体がいかにボールを追ひ、ボールに支配権をゆだねているかを思い出してもらいたい(同上書、三七九)。

この二つの指摘を用いて、改めて地震というものについて考察してみたい。

「大地が深い底から揺れ始めると、人間の存在も深い底から揺れ始める」というとらえかたは、まさに「私」を譲渡する瞬間のことを表現している。ひとりひとりの私は地面や建物の床の上や自動車や電車の中に居る。私たちの日常は、足元が不動であるということを大前提にして成り立っている。私の行動も私の思考も、そして他の人との関係もすべて、足元が不動であるという前提で成り立っている。大地は安定したものであり、その上の建物も、文字通り私たちの「最後の味方」である。突然、その「動かざる大地」が「深い底から揺れ始める」と、建物は揺れ、そこにあるものはすべて揺れ、私も揺れる。私たちは、大地が深く揺れ始めた瞬間に「私」を譲渡するばかりではなく、私たちがつくってきた建物と、その上やその中においている「あらゆるもの」を、その「揺れ」に譲渡してしまう。床と壁と天井で囲んできた家や会社や工場や学校や商店のなかの無数の空間、自動車、電車、駅など、すべてのものを突然に「放棄」してしまう。百年前には百年前のその時に、千年前には千年前のその時に、大地の上にあつたあらゆるものは「揺れ」に譲渡されたのである。個人的な感覚で言い直せば、突然、私の足元の床や地面が激しく揺れ、そこに居る私も揺れる。揺れている私自身が気づくことのできる範囲で、まわりのものすべてが揺れている。あらゆるものが、人間であるかそうでないかという区別なく「揺れ」の「しもべあるいは客体」となるのである。建物の素材も、空間も、私も、他の人も、すべてが、そうした区別なく同じように、一瞬のうちに激しく揺れ、場合によっては、壊れる。何年間もずっと安定していたはずの大地に「裏切られた」瞬間である。しばらくすると、揺れは収まる。強い揺れは、その後も断続的に生じるのであるが、最初の大きな揺れは、短時間で終わっている。

地震の被害とは、あらゆるものを「揺れ」に譲渡してしまった後の結果のことである。壊れたり、上のものが下になっていたり、家が動いていたり、地面が割れている。夥しい地震の被害の記録には、ものの場所やかたちの変容が描かれている。人間も、あの瞬間には、年齢や地位といったものは剥奪されて、ただ身体として「揺れ」に譲渡されてしまう。避難所でひとつの教室に避難した人の数を数えようとして、「二〇かける一〇で百人ですね」と把握したという挿話は、そのことを正確に描いている。どこのだれであるかも分からないまま、およそ百人というように把握される。それは、「私」というものを「揺れ」に譲渡された直後の人間の姿である。本稿の最初に取り上げた「発生した地震への対応」とは、いわゆる復旧の過程のはじまりである。短時間で確定してしまった被害から、いかにして復旧するのか、という過程である。電鉄会社はただちに徒歩での巡回と復旧作業を開始し、二四時間後には、限られた範囲ではあるが、運転を再開する。

しばらく後には、生き残った者同士の「われわれ」という、その場の人間同士の新たな結びつきのようなものが生じることもあるだろう。この「われわれ」は、一瞬前の、つまりは揺れる前の「私」をすべて無化してしまった「われわれ」である。短い間だけ「私」を譲渡してしまった私たちは、新しい「われわれ」という結びつきができる瞬間もあるのだが、生き延びた後には、少しずつ地震の前までの「私」に戻ろうとする。

避難所のできごとは、地震の直後にできあがったと思った、同じ地震で揺れた「われわれ」という結びつきが、次第に失われていく過程である。同じように大変であったこと、幸いにも「無事」であったことを確認し、亡くなった人たちの自責の念を抱きながら、次第に個別の被害の相違や地震前の生活の相違、将来に向けての展望の違いなどがみえてくる。それは、端的に言えば、地震の揺れがはじまる前に戻ろうとする過程のはじまりである。避難所のなかで、世帯毎に壁がつくられて、元の住所や氏名によって地図を作成したことがあった。また、避難所から職場や学校に通うということにもなっていた。少しずつ、元の「私」の日常に向けて動いていくのである。ペンツで弁当をもらいに来るということが避難所のなかで話題になったことは、「われわれ」から元の「私」へと戻る過程を

象徴している。

大きく揺れた大地が、断続的に揺れ続けながら、やがて、日常の揺れに戻る（ように思われる）のと並行して、私たちは、それぞれの人生で一度だけの体験、「未曾有也」の体験であるために、再び、大地が不動で安定したものであり、私たちの「味方」であると思ひ込んでしまう。

百年前、千年前という今生きている私たちの誰も知らない時に大きく揺れた後、長い間「最後の味方」であったはずの大地、私たちの誰も味方であることを意識しないほど不動だと思ひ込んでいた大地が、何の前触れもなく突然に、一瞬の間だけ揺れる。大地がみずから支えていたはずの、そのように私たちが思ひ込んでいたあらゆるものを、無断で「揺れ」に対して「譲渡」させてしまう。それが地震というものの本質ではないだろうか。

(二〇一五年二月三日)

参考文献・資料

- 『朝日新聞』一九九五年一月一七日々刊、東京本社三版。
- 『朝日新聞』二〇一一年八月一七日々刊。
- 井上光貞監訳『日本書紀Ⅲ（中公クラシックス）』二〇〇三年、中央公論新社。
- 今村明恒『増訂大日本地震史料序』文部省震災予防評議会『増訂 大日本地震史料』第一巻、一九四一年。
- 宇佐美龍夫『大地震—古記録に学ぶ』そして、一九八七年。
- 宇佐美龍夫ほか著『日本被害地震総覧 599—2012』二〇一三年、東京大学出版会。
- 宇津徳治『地震活動総説』一九九九年、東京大学出版会。
- 株式会社ラジオ関西西震災報道記録班編『RADIO—AM 神戸 69 時間震災報道の記録』二〇〇二年、長征社。
- 北原糸子『地震の社会史—安政大地震と民衆』二〇〇〇年、講談社学術文庫（原書は一九八三年、三一書房）。
- 国立天文台編『理科年表』第八七冊、二〇一三年、丸善。
- 小島圭二『自然災害を読む』一九九三年、岩波書店。
- 『古事類苑』地部三、一九一三年、神宮司府編（引用は、第四版、一九七七年、吉川弘文館より）。
- 坂本太郎ほか校注『日本書紀 下（日本古典文学大系）』一九六五年、岩波書店。

地震調査研究推進本部ホームページ (<http://www.jishin.go.jp/>) 二〇一四年一〇月。
清水幾太郎「明日に迫ったこの国難」清水幾太郎監修・関東大震災を記録する会編『手記・関東大震災』一九七五年、新評論(初出は「読者に訴える」『中央公論』一九七三年九月号)。
Serres, Michel, *Le Parasite*, Grasset, 1980. ミッシェル・セール『パラジット―寄食者の論理』及川馥・米山親能訳、一九八七年、法政大学出版会。
『世界大百科事典アルマナック』第二版、二〇〇五年、平凡社。
寺田寅彦「津浪と人間」『天災と国防』二〇一一年、講談社学術文庫(初出は『鐵塔』一九二三年九月号)。
日本地震学会地震予知検討委員会編『地震予知の科学』二〇〇七年、東京大学出版会。
阪急電鉄「地震発生後二四時間の初動状況概要(神戸線)」阪神・淡路大震災鉄道復興記録編纂委員会編『よみがえる鉄路―阪神・淡路大震災鉄道復興の記録』一九九六年、山海堂。
藤田和夫『変動する日本列島』一九八五年、岩波新書。
藤田和夫・佐野正人「阪神・淡路大震災と六甲変動―「震災の帯」をもたらした埋没地形」『科学』一九九六年十一月号(後に「科学」編集部編『大震災以後』一九九八年、岩波書店、所収)。
文部省震災予防評議会『増訂 大日本地震史料』全四卷(第一卷から第三卷までは一九四一―四三年刊。第四卷は、武者金吉『日本地震史料―並びに隣接地域』として一九五一年に毎日新聞社より刊行された)。

A Betrayal by the Earth and the Transfer of Materials to the Earthshaking Sociological Analysis of the Earthquake (5)

HARADA Takashi

要約：本稿では、単に被害が生じる自然災害のひとつとしてではなく、地震が固有にもっている特徴あるいは本質というものを考察した。

大きな地震が起きて被害が生じる。日本には夥しい数の記録が残っている。新しく生じる地震についても記録され、互いに比較される。そうした発生後の状況だけでなく、なぜ発生したのかという要因も分析されている。それによれば、日本列島は地震と火山の噴火が続いている場所であるということが説明される。同じ場所で大地震が発生する間隔は、百年、千年という長さであり、人の一生の長さと比較すれば、時代や場所を問わず、誰にとっても常に「未曾有也」という体験になる。

ある社会学者は、一九二三年の関東大地震の体験を回顧して、不動であり、自分たちにとって「最後の味方」であると思っていた大地による「裏切り」であると考察している。

フランスの哲学者ミッシェル・セールは、「準－客体」という概念に関連して、「われわれ」とは「私」の総体であるというよりも「私」の譲渡の総体の集合であると論じている。

こうした考え方を元にして考察すれば、地震とは、地面の上に存在するあらゆるものが、人もものも区別なく、地面の「揺れ」に譲渡される瞬間であるということが出来る。突然の地震発生以前には、「最後の味方」だと思っていた大地の「裏切り」であり、あらゆるものがその「揺れ」に向けて「譲渡される」のである。その後に生じることは、一般的には被害と呼ばれているが、地上の状況を地震発生以前に戻そうという作用、「譲渡される」以前に戻そうとする作用である。そして、大地震の発生から時間が経過するにつれて、私たちはまた大地を不動のもの、自分たちの「最後の味方」だと思い込むようになる。

Abstract : In Japan, we sometimes suffer severe damages of the great earthquakes. We have a lot of written documents about the earthquakes and damages we had suffered. According to the modern geological analysis, we are always suffered by the earthquakes and volcanic eruptions in the Japanese Archipelago. But their interval is so long, such as one hundred or one thousand year that we always suffer for the first time in our life.

What is the essence of the earthquake? A sociologist who was suffered by the Great Kanto Earthquake in 1923 said that earthquake is a betrayal by the earth which we thought immovable and the best ally for us.

By using the theory of 'quasi-subject' by Michel Serres, it could be said that at the moment of the earthquake, all the materials including human beings on the earth of suffered area are transferred to the movements of the earth. So the process of restoration is definitely the process of restore the states of materials exactly as they were before the earthquake happens. Then as time passes, we once again think the earth is immovable and best ally for us.